

# 「P B I S（倉敷モデル）で笑顔あふれる学校に」

倉敷市立西中学校 松本 一郎

## 1 ポジティブ行動支援（P B I S / P B S）の広がり

近年、ポジティブ行動支援（P B I S / P B S）を実践する学校が増えている。第56回岡山県中学校長研究会美作大会においては、総社市立総社西中学校、津山市立鶴山中学校の実践に取り上げられた（令和元年10月）。岡山県優良実践発表会においては、笠岡市立笠岡東中学校の実践に取り上げられた（令和元年12月）。日本教育公務員弘済会岡山支部「教育研究収録」【優秀賞】里庄町立里庄中学校、【優良賞】岡山市立福浜中学校、両校の実践は、スクールワイドP B I S（School Wide P B I S：学校全体で行うP B I S）と呼ばれる実践である（令和2年3月）。他にも、岡山県教育委員会が示した「学校経営アクションプラン」の中学校モデルプランの下段「2豊かな心の涵養」に、「『P B I S』を推進し、お互いの良い行動を可視化することで、生徒の自己肯定感を高める。」と説明しており、具体的実践例として「Good Behavior チケット」の紹介もある。

また、倉敷市内においても、実践の温度差はあるものの、26中学校区のなかで、本校西中学校区をはじめ、11中学校区の小中学校でポジティブ行動支援（P B I S / P B S）に取り組んでいるとの報告がある（令和元年度「研究集録」令和2年3月：倉敷市人権教育研究協議会）。

このように急速に実践が広がるとともに、研究実践発表等で注目を集めているポジティブ行動支援（P B I S / P B S）を、平成31年4月から本校にも導入し実践している。

## 2 ポジティブ行動支援（P B I S / P B S）とは何か？

### （1）名称と表記について

このことについての日本語訳は、様々であったが、日本行動分析学会員からなる日本ポジティブ行動支援ネットワークによって、2017年に「ポジティブ行動支援」と名付けられた。

Positive Behavioral Interventions and Supportsの頭文字をとって、P B I Sと表記される。P B Sと表記される場合もある。米国では、教育分野でP B I Sの使用が多いが、わが国では、今後P B Sと表記されると思われる（日本ポジティブ行動支援ネットワーク、2020）。ただし、当分の間は、P B I SとP B Sとは同意として併用されるであろう。本稿では、以下、「ポジティブ行動支援」については、P B I Sと表記する。

### （2）P B I Sの誕生の背景とその源流

P B I Sが米国で誕生して約30年になる。始まりは1990年代にさかのぼる。90年代当時の米国では、ゼロ・トレランス（寛容性ゼロ）という問題対処的、処罰的、排除的指導があった。しかし、学校から排除された生徒たちは、社会への参画という希望も失う結果となった。格差が広がる社会を教育の力によって改善するため、P B I Sが急速に広がりを見せた背景には、「落ちこぼれをつくらないための初等中等教育法（N C L B A，2002）」の施行、また、米国連邦教育省特別（支援）教育局の研究、財政・人材面の援助など、政府の強力なサポート体制の整備があった。2018年には、P B I Sは、米国の26,000校以上で実施されている。

さかのぼれば、その源流にはキング牧師らの公民権運動（1962）やノーマライゼーションの普及など、米国における人権思想の高まりや進展がある。

他にも、マーティン・セリグマン（「セリグマンの犬」で有名な学習性無力感の研究者）は、生活の不都合な面を改善するという心理学の在り方を見直し、多くの人々がより幸福に生きること

に貢献する心理学の活用を目指し、「ポジティブ心理学」を提唱した（2002）。幸福から持続的な幸福を求める「ポジティブ心理学」の考え方は、間接的にP B I Sに影響を与えている。

さらに、P B I Sの理論的ベースとなる行動理論の立場から見ると、人の行動に介入するときの「非嫌悪的なアプローチ」（罰や脅し、叱責等ではない対応）への転換がある。具体的には、障がい者・認知症者への身体拘束の禁止、長期間の入院治療の改善など、人間の自由尊重の価値観が行動理論にはあり、P B I Sの基本的な価値観の一つとなっている。

### （3）わが国へのP B I Sの紹介と導入

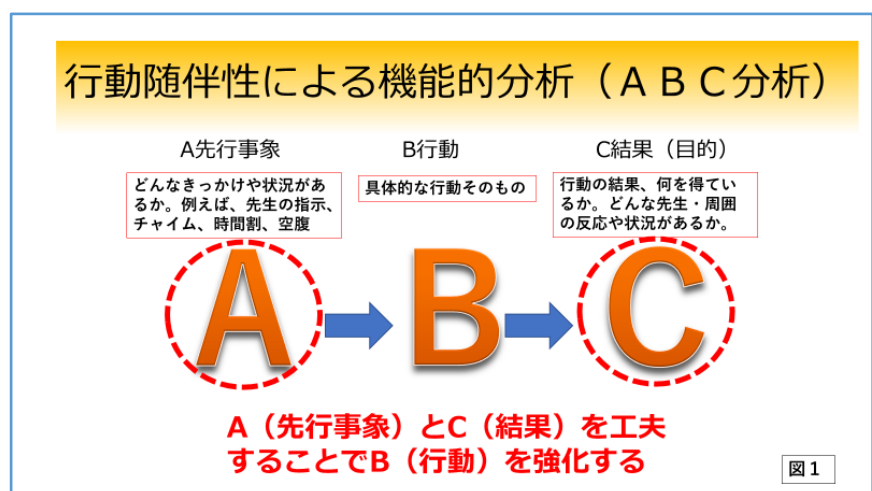
米国におけるP B I Sは、様々な形でわが国に紹介されてきたと思うが、早い時期としては、「世界の学校予防教育」（山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生編，金子書房，2013）に、まとまった形で紹介されている。安心で安全な学校環境を形成するための学校予防教育としては、問題対処型の指導が世界的に行き詰まりを見せ、世界の潮流として未然防止型の学校予防教育の開発が期待されている。プログラムとしては、百花繚乱の感がある。アメリカでは、P B I SとS E L（Social and Emotional Learning:社会性と情動の学習）がその中心になるであろうと考えられている。P B I Sについては、オレゴン大学のロバート・ホーナー博士，コネチカット大学のジョージ・スガイ博士がプログラム開発の中心として紹介されている。

わが国の実践では、平成18年ごろ，東京都の公立中学校でのスクールワイドP B I Sの実践が最初であろう。該当校長は石黒康夫氏で，現在は，桜美林大学の教授である。石黒氏は，当時の実践を博士論文としてまとめ「学校秩序回復のための生徒指導体制モデル」として刊行する（風間書房，2015）とともに，スクールワイドP B I Sの実践導入ガイドとして，「参加型マネジメントで生徒指導が変わる」（三田地真実氏との共著，図書文化，2015）を著し，わが国におけるスクールワイドP B I Sの紹介・普及・発展に貢献している。星槎大学教授の三田地真実氏は，オレゴン大学のホーナー博士から直接P B I Sを学んだ専門家で，日本ポジティブ行動支援ネットワークの理事でもある。

近年では，「P B I S実践マニュアル&実践集」（栗原慎二編著，ほんの森出版，2018）が，「マルチレベルアプローチだれもが行きたくなる学校づくり」の一つの柱としてのP B I Sを理論と実践の両方から具体的に紹介しており，すぐに役立つアイテムも一緒に紹介されている。

### （4）P B I Sを支える考え方

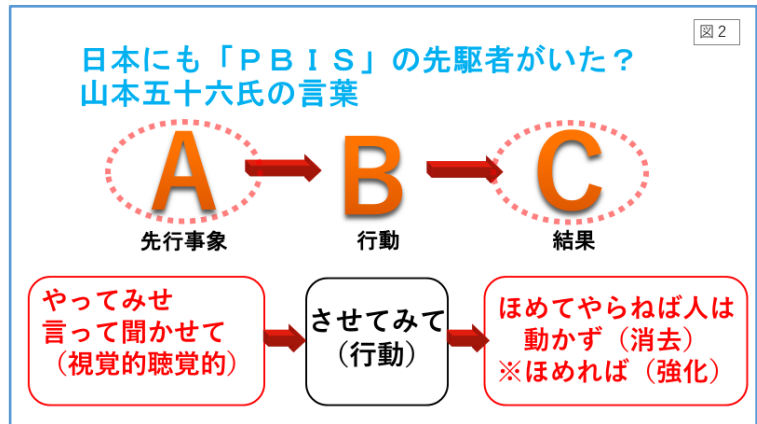
P B I Sの考え方の基礎となっているのは，応用行動分析学である。応用行動分析学とは，行動理論を，教育や医療，産業やコミュニティーなど様々な分野に応用し，人々の生活や福祉の向上に貢献しようとする学問である。行動理論は，精神分析的な心理学に反対したワトソンやスキナーらを中心とした行動主義心理学と呼ばれる心理学の理論である。行動は，環境との相互作用であると考えられ，その発想の起源には，ダーウィンの進化論がある。パブロフの条件反射をはじめ動物を対象とした実験を中心に，レスポナデント



条件付けやオペラント条件付け（スキナー）が有名で、P B I Sにも応用される基礎理論となっている。近年では、認知行動療法（C B T）のように、うつ病や適応障害に高い治療効果を発揮している心理療法も、この考え方をもとにしている。行動主義心理学には、「アメ」と「ムチ」による動物の訓練・調教のようなイメージがあるが、行動分析学会が最も力を入れているのは「体罰の禁止」であるように、人間尊重の精神を大切にしている。

P B I Sの基本的考え方は、不適切な行動や問題行動に対して、罰を与えるのではなく、適切な行動を分かりやすく丁寧に教え（A）、少しでも適切な行動ができたなら（B）、認める・ほめるなどの強化を行い（C）、一連の（A）⇒（B）⇒（C）で、示されるような仕組みをつくることにある（図1）。

初めて見る方には、少し難解なところがあると思うが、わが国にも先駆者がいたので紹介したい。山本五十六氏の言葉「やって見せ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かず」である。まさに、A B C分析を端的に表現している言葉と言えよう（図2）。



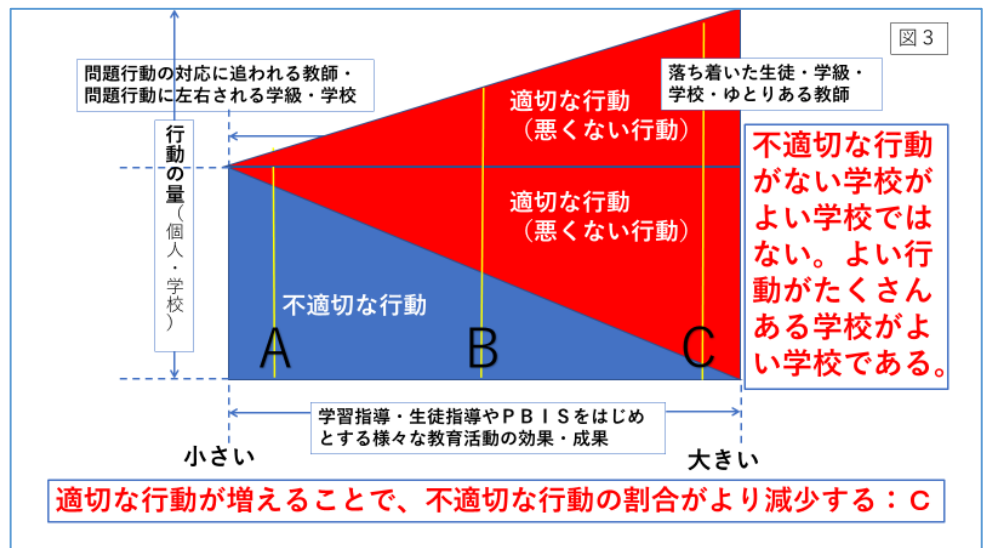
(5) よい行動に着目するという生徒指導の転換

不適切な行動に着目して、適切な方向に指導し、これをなくしていくことが、これまでの生徒指導の中心的な考え方であった。一部の不適切な行動は、多くの他の生徒にも影響を与え、同調する生徒が学級や学校に広がり、混乱が増大する。学級で起これば学級崩壊と呼ばれ、学校全体に広がれば荒れた学校と言われる。ベテランの教員から若手の教員に、「初めが肝心、生徒に馬鹿にされるなよ。」というアドバイスが与えられる。生徒の問題行動を細かく注意することによって、若手教員は生徒との信頼関係が損なわれ、学級が乱れてくる。どこにでもありそうな光景である。

適切な行動と不適切な行動は、同時にはできない。どちらかが増えれば、どちらかが減るといえる考えがP B I Sの中心となる考え方の一つである。これを知ったとき、私は、これまで大多数の適切な行動をしている生徒たちを、十分に強化して来なかったことを痛感した。

適切な行動が増えることによって、不適切な行動は減少する。私たちは、適切な行動を増やすために、毎日、教育活動を実践するべきではないか。不適切な行動がない学校を目指すのではなく、よい行動が

たくさんある学校をつくらなければならない。この考え方への転換こそ、P B I Sを支える理論の最重要点であると考えている（図3）。



### 3 P B I S（倉敷モデル）のアイデアはどのように生まれたか？

#### (1) わが国へのP B I S導入の課題

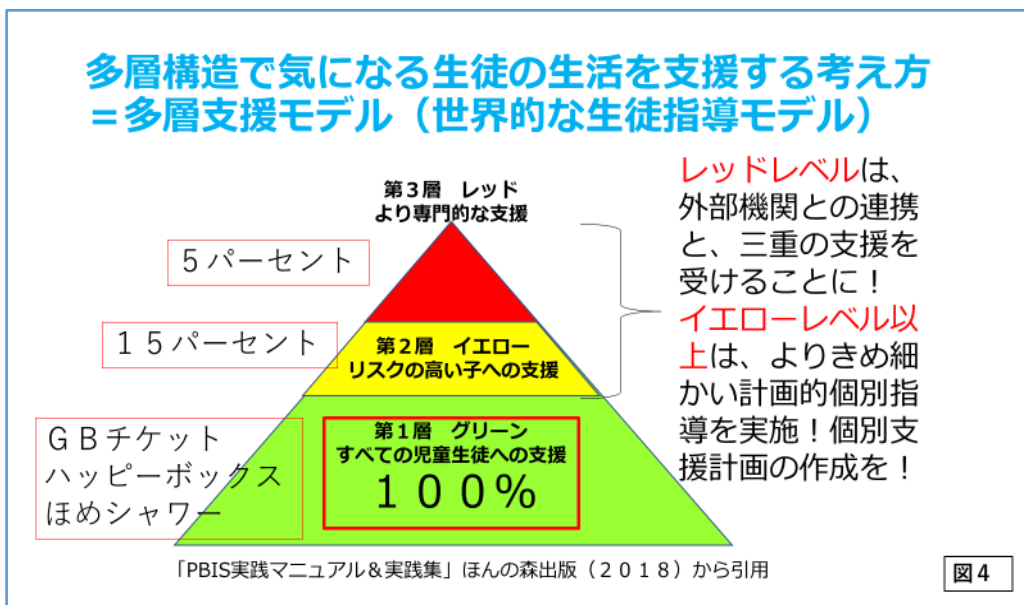
米国で実施されているP B I Sを、そのまま日本の学校現場に取り入れるためには、人材としての専門家の支援は必須である。他にも人件費等の予算、研修（時間）の確保、それらを支える制度設計などクリアすべき課題は多い。先に紹介した岡山県の先進校においても、それぞれの実践に専門家が入って、教員研修を行うなどの実績がある。これらの条件整備を期待して、百年河清をまっけても、眼前の学校課題は解決できない。

また、A B C分析のCの強化に当たると褒美（トークン）として、米国では、食べ物（お菓子や飲み物）や好きな映画を見ることが出来るカード、ランチを選べる券など、即物的な褒美を使用することが多い。このような褒美は、わが国の教育にはそぐわない一面もある。

さらに、徹底的行動主義（スキナー）に反対する内発的動機付けを重視する立場（「人を伸ばす力」エドワード・デシ著、櫻井茂男監訳、1999、新曜社）からは、褒美がやる気を減退させ、自律的な行動を阻害する（アンダーマイニング効果）ことも指摘されている。しかし、「外的報酬が報酬を与えられる人の有能さを認め自律性を阻害しないように与えられるならば、内発的動機付けはむしろ高まる」と櫻井氏は述べている。この条件をクリアしているのが、P B I Sで活用されているGood Behavior Ticket（グッドビヘイビアカード、以下、GBカードとする。）である。本校のカードは、お金にも食べ物にも交換できない。櫻井氏の指摘する通り、生徒の有能さを認め、やる気（自律性）を阻害しないので、効果が高いと言える。

#### (2) P B I Sの多層支援モデルは世界標準

スクール  
ワイドP B  
I Sの実践  
に、GBカ  
ードと呼ば  
れるカード  
が使われる  
ことがある。  
これは、  
A B C分析  
のC、つま  
り、望まし  
い行動を強  
化する褒  
美（トークン）



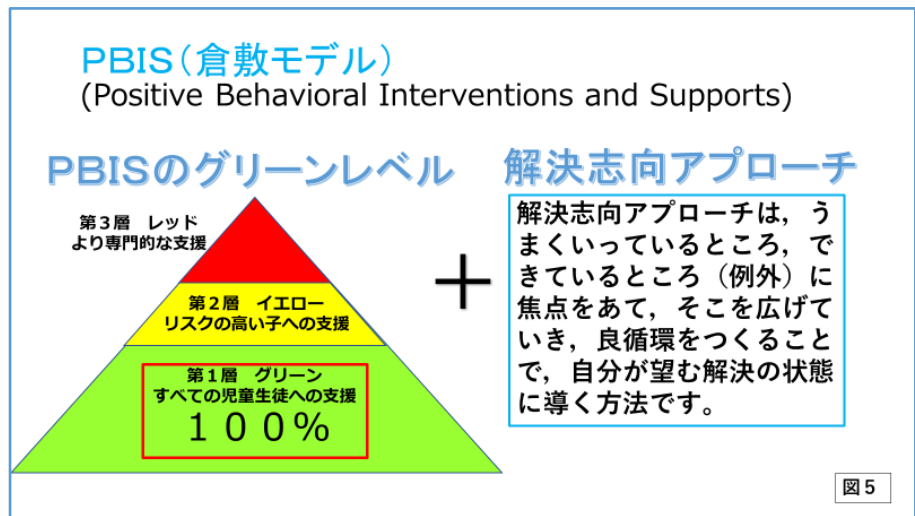
にあたる。GBカードは、学校のすべての生徒に配付される。

P B I Sは、図4にあるように多層支援モデルをもととし、一次的支援（100%）、二次的支援（15%）、三次的支援（5%）と支援のレベルを手厚くする。一次的支援は、自分で適応できる生徒を対象。二次的支援は、教員・生徒の支援で適応できる生徒を対象。三次的支援は、専門家や専門機関との連携が必要な生徒を対象とするイメージである。5%程度と考えている三次的支援を受ける生徒は、手厚く三重に支援を受けることになる。このような総合的な多層支援がP B I Sであり、また、このような多層支援モデルは世界的な生徒指導の標準モデルとなっている。

このことから見てみると、本県の学校で実践されているPBISの多くは、全校生徒を対象とした一次的支援の実践ということになる。それだけでも、大きな効果があることが、多くの実践とその広がりから理解できる。

(3) PBIS (倉敷モデル) は、PBISの一次的支援と解決志向アプローチのセット

PBISの二次的支援, 三次的支援を実施するためには、行動分析の専門家のアドバイスが必要である。また、専門家に替わる教員を養成するためには、数十時間の研修も必要になるだろう。PBISの全体像を理解したうえで、どの学校でも、学級からで



も、今までやってきた教育活動を再利用してできる方法や、少し見方や考え方を变えることで、専門的な研修を長時間受けなくても、簡単にできて、効果がある方法、PBISの原理を理解すれば応用が利き、たとえ失敗しても副作用がない方法が開発できないだろうか考えた(図5)。

そこで、PBISの一次的支援と解決志向アプローチを組み合わせて、実践するプログラムを計画した。詳しくは、倉敷市教育委員会人権教育推進室のホームページに、人権教育実践資料4「ポジティブな行動支援によるいじめの未然防止」(平成31年3月)、人権教育実践資料5「ポジティブな行動支援によるいじめの未然防止II」(令和2年3月)として、研究成果を公開しているのでご参照願いたい。

(4) 解決志向アプローチとは?・・・問題対処的発想と解決志向的発想の比較(図6)

「問題を追及すれば問題を手に入れる。解決を追及すれば解決を手に入れる。」スティーブ・ド・シェイザー

図6

従来の問題対処的発想と解決志向的発想を比較すると

問題対処的発想の特色	解決志向的発想の特色	PBISとの共通点
不適切な行動(問題点、できてない点)に着目	適切な行動(うまくいっているところ)に着目	適切な行動に着目する
問題の原因を探る(過去志向、責任追及志向)	望む解決の状態を具体化する(未来志向)	行動の結果得るものは?
問題への対策(罰・禁止事項)を考える指導(問題が起きてから対策を考える)	うまくいっていることを積み重ねる指導(スモールステップ、積極的に未然防止に努める)	罰や脅しを使わない
減点法→自尊心を高める(悪循環を生む)	加点法→自尊心を高める(好循環を発揮)	常に適切な行動を強化
失敗の責任追及(何でできないのか?)	成功の責任追及(どうしてできるのか?)	必ずできる肯定的信念
だれもがうまく指導できない場合もあり、副作用(二次障害)を生む。保護者の反発を買うことも	だれもが指導できて、副作用(二次障害)を生まない。保護者の協力が得やすい	共感・協力者を得やすい

20 世紀最大の心理臨床家と言われたミルトン・エリクソンは、医学的な催眠療法を駆使して、様々な困難事例を解決に導いてきた。エリクソンの一見、変幻自在で、だれもが思いつかないようなアイデアに満ちた質問やテクニックは、その後、スティーブ・ド・シェイザーらによって整理され、ソリューション・フォーカスト・アプローチ (SFA)、解決志向ブリーフサイコセラピー、解決志向アプローチなどと呼ばれるようになった。過去よりも未来に焦点を置くこと、問題を追及するよりも解決に焦点を当てること、人は、解決のための力 (リソース) を備えているので、それを使えるように支援すること、一見、本人にとってマイナスに思えることでも、使えるものは何でも使うこと (ユーティライゼーション)、などの特徴があるが、問題対処と解決志向を比較した図を載せているので、ご参照願いたい (図6)。一番下段に、「だれもが指導できて、副作用 (二次障害) を生まない。保護者の協力が得やすい。」とあるが、現在の若手教員が急増している学校現場の状況を考えて、例え失敗しても副作用がないことは、とても大切な条件である。

(5) P B I S と解決志向アプローチの共通点 (図7)

<b>P B I S と解決志向の共通点</b> ～うまくいくものには共通点がある～	
<b>P B I S (行動理論)</b>	<b>解決志向アプローチ</b>
正しく学習 (解決像) すればできるようになる	解決像をできるだけ具体的にイメージする
できているところ、よいところに着目する	例外 (すでに解決できている) を見つける
よい行動をほめ、励まし、勇気づけ強化する	コンプリメント (認め、ほめ、励まし、同意)
行動の結果、得ているものは何か	成功の責任追及を行う
データを活用し分析 エビデンスを重視 客観的データの蓄積と運用	スケーリング・クエスチョン (今、何点?) 主観的データに内蔵されている解決像
ポジティブな具体的行動を支援する (認知行動療法、応用行動分析)	リフレーミングで認知やとらえ方をポジティブに変換する
だれでも行動を変え、成長することができる	だれでも解決のリソース (資源) と力を持っている

「認知行動療法とブリーフセラピーの接点」(津川秀夫・大野裕史編著, 日本評論社, 2014) では、双方の専門家・臨床家が二つの共通点や相違点について、具体的な事例をもとに、多面的に意見交換してあり興味深い。それらを参考にしながら、比較したものが (図7) になる。認知行動療法を P B I S と一緒にしているところは、相当に乱暴であると思うが、行動の理論をベースとしている点では共通点が多い。私は、効果のある双方の考え方を合わせて、相談室の中から学校という集団組織への適用を想定して、両者を比較し共通点を見出した。不釣り合いな視点からの共通点もあると思うが、大まかなスケッチとしてお許し願いたい。「学校でフル活用する認知行動療法」(神村栄一著, 遠見書房, 2014) にも、学校で教員が認知行動療法をスムーズに進めていくためには、解決志向アプローチを研修することを推奨している。また、石黒康夫氏も「学校秩序回復のための生徒指導体制モデル」(前掲) に、教員研修には、S A F の手法の活用が有効であると述べている。

4 倉敷市立西中学校における P B I S (倉敷モデル) の具体的実践

(1) 実践のスタートは着任から (平成 31 年 4 月)

校長としての実践のスタートは、平成 31 年 4 月 2 日の職員会議からになる。しかし、多くの時

間をかけて、P B I S（倉敷モデル）について説明することもできず、また、このことについての組織を立ち上げることもしなかった。校長としては、始業式の言葉にP B I S（倉敷モデル）の考え方を取り入れて行った。壇上に立ち、礼をし、顔を上げて全校生徒を見渡した。「皆さん、すばらしい。姿勢もよく、私の話を聞こうという熱い視線を感じます。私は校長として、こんなにうれしいことはありません。」と言うと、生徒たちの顔がいつそう上がる。毎回、話の内容には解決志向のテーマを盛り込んでいる。具体的な実践は、倉敷市立西中学校ホームページの校長室に、すべてアップしているの、よろしければご参照ください。

他にも、日常的な実践の一つとしては、ニコニコしながら、また、うなずきながら校内を歩いている。笑顔で生徒にあいさつすると、笑顔で返してくれるし、笑顔で生徒にうなずきかけると、うなずいて返してくれる。「校長先生、何かよいことがあったのですか？」と笑顔で声をかけてくれる生徒もいる。うれしいことである。

教員が機嫌よく生徒に接することは、生徒が安心できる学級・学校をつくる「隠れたカリキュラム」の一つであり、P B I S（倉敷モデル）にも共通する重要なベースである。（「かくれたカリキュラム発見・改善ガイド」横藤雅人・武藤久慶著、明治図書、2014）

最近、コロナ禍による授業時間確保のため、週に2日しか清掃がない。ほうきとちり取りを持って校内を歩くことも、今年が多いが、生徒は「ありがとうございます。」「ご苦労様です。」と声を掛けて労わってくれる。ありがたいことである。

## （2）GBカードをスクールワイドでスタート（令和元年7月1日）

P B I S（倉敷モデル）を本格的に始めるため、6月19日の職員会議で職員研修の時間をとり、校長がP B I S（倉敷モデル）の考え方について、パワーポイントを使って説明した。同時に、ワークショップとして、その場でGBカードを教職員で書いて交換した。そのときのカードを1年以上たっても、机に挟んでいる教員もいる。人は自分のよいところや感謝の言葉が書かれたカードを手放せないものである。

職員会議では、「よいことではあると思うが、〇〇の場合はどうなるのか・・・」と、遠回しに負担感を意図する意見もあった。しかし、ノルマや強制はないこと、始めるにあたって校長が説明文を作成し、担任が学級で説明すること、何か保護者からの話があったらすべて校長が対応することを確認し、7月1日からGBカードをスタートした。

初め、3種類×1,000枚で3,000枚のGBカードを印刷し、スタートした。原画は、美術部の生徒から募集した。その中から3種類を選んで作成した。校長は、刷り上がったGBカードの最初の3枚は、それぞれデザインをしてくれた3名の生徒に感謝の言葉を書いて渡した。

初任者をはじめ、若手の教員にGBカードの親和性が高く、活用は校内に広がった。校長は、教職員にも書いた。正確にカウントしているわけではないが、私は、年間、200枚程度は生徒・教職員に書いたと思う。3,000枚のGBカードが、10月には底を尽きかけたので、別デザインのもので、3種類×1,000枚で3,000枚、追加で印刷した（図8）。

令和元年の12月、二学期の終業式が終わって職員室に帰ってくると、「校長先生、今日の話はよかったですね。」と声をかけられた。「ありがとう。」と答えると、両手を前に出してGBカードを渡す格好をしてくれる。私も、思わずもらう格好をする。校長先生、「エアーカードです。」と教員が言った。西中には、7番目のカードが生まれていたのだ。数千枚のカードが教職員によって発行されたからこそ、生まれた「エアーカード」である。何かよい行動があったとき、「それはGBカードだね。」という声を聞くことも増えてきた。書きかけのGBカードを教員の机の上に見

かける。教員がGBカードを教室や廊下に掲示している。GBカードが西中学校のものになってきたと、約半年ほどで感じるようになった。



### (3) ナンバーワンシールの活用①（二次的支援として特別支援学級での活用）

とはいえ、GBカードをたくさん書くことは、教職員にとっても負担である。データの活用というPBISの基本的な考え方を実践に生かすため、「西中No. 1シール」(図9)を作成した。4枚のシールで校章が浮き出てくる。これは、応用行動分析学をもとにしたトークン・エコノミーの考え方を取り入れたものである。

西中には、生徒指導に困難を極めた時代もあり、依田進吾校長の発案で「倉敷No. 1の西中にしよう！ 明るさNo. 1！ 元気さNo. 1！ 前向きさNo. 1！ 優しさNo. 1！」というスローガンがある。西中の校訓は、「自主 剛健 誠実 協力」であるが、それも意識したスローガンであると思ひ、これを活用しようとデザインを決めた。



GBカードは、PBIS（倉敷モデル）の一次的支援の実践であり、二次的支援へそして三次的支援へとスクールワイドで広げていくために、特別支援学級での実践に活用することにした。

令和元年度の特別支援学級（第1学年）で、授業態度を向上させる取組として担任に趣旨を説明した。原理が腑に落ちれば、実践のヴァリエーションは無限である。センスのある担任が、具体的な方法を考えて実践した。授業担当者が授業連絡カードに、授業の振り返りとして花丸を付けてくれると、シールが一枚もらえる。まず、クラスで200枚を集めようと始めた。令和2年1月のことである。目標の200枚は完成し、400枚目を目指している途中に、新型コロナウイルス感染症拡大のため、臨時休校に入ってしまうと中断した。2学期の途中まで、何かと混乱すること



が多い学級であったが、この取組を始めて、教科担任からも褒められることが多く、落ち着いて授業を受けることができるようになった。

#### (4) ナンバーワンシールの活用②（一次的支援としての生徒会活動での活用）

このシールを使って、生徒会があいさつ運動を始めた。一次的支援の実践である。今までも、SAC（スマイルあいさつ中学生）運動として、あいさつ運動をしていたが、マンネリ化の傾向もあった。このシールを使って、あいさつ運動を盛り上げようと、生徒会執行部と担当教員に投げかけた。

生徒会執行部は、あいさつ運動実行委員を募集した。全学年で約80人の応募があった。生徒会執行部は、切手シート状に印刷してあるシール約5,000枚を1枚1枚切り取り、パッケージに入れて準備した。あいさつ運動実行委員が、校門や下足箱周辺であいさつをし、返してくれた生徒にシールを渡す。もらった生徒は、教室のペットボトルに入れ、クラスの実行委員は集計表に貼っていく。1.5センチ四方の小さなシールであるが、渡す生徒ももらう生徒も笑顔にしてくれる。あいさつという適切な行動が、シールという物に形を変えて、カウントできるように可視化された。これもPBI Sの原理を応用した取組である。令和2年1月中旬からスタートしたが、これもコロナ禍のために中断せざるを得ない状況になった。シールを手渡すという行為が、感染拡大を招いてはいけないので、再開については、現在、検討中である。



#### (5) PBI S（倉敷モデル）でコロナに立ち向かう（令和2年5月）

GBカードについて、令和2年2月中旬に生徒対象アンケートを行った。3年生は、もらうとうれしいという意見が多かったが、中には、「私は、そういうものがなくても普段からよい行動を行っている。私は欲しいとは思わない。これには、私たちの行動をコントロールしようとする先生の意図があるのではないか。」という意見があった。とても貴重な意見であると感心した。同時に、「GBカードは、先生から生徒に渡されます。私たちが、友達や先生に書くことができるカードを作ってください。私たちも書きたいのです。」という何人もの意見があった。そこで、美術部の生徒作品をベースに、4種類×1,000枚のカードを印刷した。カードの頭文字をとって、NBMWカードと名付けた。令和2年3月である。



カードの頭文字をとって、NBMWカードと名付けた。令和2年3月である。

第3学年のいくつかのクラスでは、5月の分散登校中であっても、クラスの一体感を醸成したと、いくつかの取組があった。そのクラスでは、奇数組と偶数組がそれぞれ励ましのメッセージを送り合う「ハッピーレインボウプロジェクト」を行った。その後、6月1日からクラス全員の登校が可能となった。担任から、学級活動でNBMWカードを使って、学級でメッセージを交

換したいと申し出があった。40枚を渡して、10分ぐらい経過したとき、担任が校長室に来て、「校長先生、全然足りません。あと200枚ください。」と言った。200枚渡して、教室に行ってみると、生徒は7～8枚は書いていた。生徒が、臨時休校や分散登校でできなかった、友達との触れ合いを求めていることが分かった。他のクラスでも200枚が1時間でなくなったということだった。これらの活動で、当初に印刷した4,000枚がなくなってきたので、次の生徒会が主催する活動のために4種類×1,000枚を追加で印刷した。

#### (6) 生徒会がNBMWプロジェクトをスタート(令和2年7月)

「私たちが書くことができるカード NBMWプロジェクト」を生徒会が主催して7月からスタートした。まず、生徒会執行部と専門委員長が、一人4枚のNBMWカードを書いた。それをもとにポスターをつくり、掲示するとともに、生徒会だよりで趣旨やカードを広報して、全校生徒に呼びかけた。以前からあった目安箱を赤く塗り替え、投稿用のポストにした。投稿されたNBMWカードには、生徒や先生のよい行動に対する感謝やお礼が書かれている。生徒会執行部が読んで、お昼の放送で紹介するとともに、紹介された生徒には、校長や生徒会長から感謝状を贈るというものである。投稿されたNBMWカードを掲示する掲示板も作成し、順次、掲示していきたいとのことである。

カードが可視化されることによって、二つの意味が具体化される。一つは、カードの量が増えることである。これは量的データの可視化になる。もう一つは、そこに書かれた内容を生徒が読むことである。これは質的データの可視化になる。ポジティブ行動支援におけるデータの活用が、ここに明示されることになってくる。この取組を続けることによって、よい行動と笑顔があふれる西中学校になってほしいと期待している。

### 5 成果と課題

#### (1) 西中学校にミラクルは起きるか？

「倉敷市ナンバーワンは、すでに実現している。これからは日本一の西中をめざそう。」平成31年4月2日の職員会議で私が言った言葉である。言うは易くではあるが、P B I S(倉敷モデル)の実践によって、様々なエピソードがあった。

初任者のA教諭が、1学期の保護者懇談でGBカードを全員に用意した。それを生徒と保護者に渡してから、懇談をスタートした。笑顔から懇談が始まるので、とてもポジティブな雰囲気になった。「自分は、何かと行き届かず、保護者も言いたいことがたくさんあったと思いますが、G



Bカードで少し我慢してくれたのかもしれませんが。」A教諭が明るい表情をしているので、「何かよいことがありましたか？」と尋ねたときに教えてくれた話である。

他にも、本校の通知表は、1・2学期には所見がないので、GBカードに学級全員のよいところやできているところ書き、通知表に挟んで渡している教員も複数いる。意識の高い担任が、GBカードという環境を有効に活用して、生徒との関係を築こうとしている好事例である。

昨年は、ほとんど学校に来ることができていない状況だったBさんは、7月13日の今日まで、欠席は4月の1日のみである。遅刻や早退はあるが、毎日、学校に来ることができている。「Bさんは、本当にすごい頑張りですね。毎日学校に来たいと思う何かきっかけになることがありましたか？」と担任のC先生に聞くと、「本人は、数学がとても好きで、授業にも積極的に臨んでいました。そのことを数学の教員から聞いて、私がGBカードを書いて渡しました。本人も保護者も、そのGBカードを読んで、とても喜んでくれました。このようなカードをもらったのは初めてだということでした。西中にGBカードがあったから、Bさんの登校意欲が一層高まったと思います。GBカードのお陰です。」と話してくれた。5月初めの分散登校の頃の出来事だったという。これも、GBカードという環境が効果を発揮している例である。

私は、修学旅行（令和元年5月）で、なかなか教室に入れないDさんが、けがをした級友を労わる言葉を聞くことができた。GBカードに、そのことを書いて感謝の言葉とともに、担任に渡してもらった。数日後、出張から帰ってきた私の姿を見つけて、Dさんが走り寄ってきた。私は、何の事かと思ったが、「あの紙ありがと。タンスに貼っとるで。」と教えてくれたので、GBカードのことだと分かった。Dさんのよいところが書かれたGBカードが、家族みんなの見えるところに、誇らしく飾られていることをうれしく思う。GBカードは、学校と家庭の好循環をつくるのが分かる。教員の善意が家庭に伝わりにくい昨今、生徒の適切な行動を可視化し保護者に伝えることは、保護者の信頼を得るためにも効果がある。

日常生活の中で、生徒が先生の荷物を持つことを申し出たり、プリントの配付を申し出たりするなど、よい行動に対するハードルが、次第に下がりつつあるように、教員の話から感じる。統計的に前後の比較を数値化できるほどの情報は持っていないが、PBISの重要なポイントの一つは、経験や勘で判断するのではなく、データを活用することである。本校の実践では、そのことが一番の課題である。まだ、本校の実践は、始まったばかりである。今後、PBIS（倉敷モデル）の原理・原則を踏まえた新しいアイデアが続出し、教員それぞれの創意工夫によって、生徒のよい行動が次々に引き出されることを望んでいる。それは、やらされるのではなく、教員が主体的に楽しんでPBIS（倉敷モデル）に取り組んでいる証左となるだろう。

## （2）授業にPBIS（倉敷モデル）を取り入れる

令和元年には、研究授業として、6月に学級活動（第1学年）、英語（第2学年）、美術（第3学年）を行った。10月には、公開授業として、学級活動（第1学年）、道徳（第2学年）、社会（第3学年）を行った。幼稚園、小学校、中学校の教員約200名の参加があった。すべての授業に、PBIS（倉敷モデル）の趣旨を生かして、学習指導案を考えてもらった。10月の学級活動は、ミラクルクエスチョンという解決志向アプローチの中でも強烈な効果がある発問を中心発問とした授業であった。私の知る限りでは、前例のないユニークで温かい授業であったと思う。この温かさが、いじめを未然に防止する抑止力となると感じたのは、私だけではなかったと思う。

来年度からの新学習指導要領の完全実施に向けて、PBIS（倉敷モデル）の可能性は大きいと考えている。生徒のできているところ、できそうなところに着目して、自尊感情を高めつつ学

習意欲を喚起し、主体的・対話的で深い学びを実現していくために、今後とも授業への導入を研究していきたい。例えば、授業内容を深める発問として「成功の責任追及」を活用したい。どうしたらうまくできたのかを問う質問である。個人にも協同学習にも使うことができる。生徒指導と学習指導は車の両輪ともいわれるが、P B I S（倉敷モデル）は、その車軸になることもできる。すでに米国においては、SWP B I Sが問題行動支援に、R T I（response to intervention）が学業支援に活用され、この二つを統合したM T S S（multi-tiered system of support）という多層支援システムが活用され効果を挙げているという。今後、わが国への導入も期待されよう。

（3）悪いことがない学校がよい学校ではない、よいことがいっぱい为学校がよい学校である

そもそも正しい知識や技術を分かりやすく教え、繰り返し練習させて身に付けさせることが、学習の基本であると認識している。しかし、いじめや情報モラルなどの生徒指導の問題については、ネガティブな場面を取り上げ、それを禁止する方向に授業は進む。応用行動分析の教科書には、「死人テスト（Deadman Test）」というものがある。行動分析における行動とは、死人でもできることは行動ではないと規定する。例えば、「いじめをしない。」は、「死人は、いじめはしない。」ので死人でもできるので行動ではない。逆に「いじめを止める。」は、死人にはできない、適切な行動である。すなわち、禁止や受け身形での表現は、行動ではないと考える。校内の掲示物やポスター等に、また、生徒の行動を表現するときに活用したい原則である。

この原則から学校を見てみると、大多数の生徒が、適切な行動をしていることが分かる。大切なことは、大多数の生徒が取っている適切な行動に、どれだけ私たちが反応しているかが問われているのだ。櫻井茂男氏（内発的動機付け論者）は、デシの論考をもとに、「子どもたちに適切な行動を行わせようとするときには、愛情をその行動に随伴させるのではなく（その行動ができるようになることだけに愛情を注ぐのではなく）、すべての行動に愛情を注ぐことが重要である」と述べている。この点では、P B I S（倉敷モデル）とも共通していることが分かる。

P B I S（倉敷モデル）は、大多数の生徒が行っている全ての適切な行動に、全教職員で愛情をもって反応し、それを強化することであると考えている。大多数の生徒が行っている適切な行動を、さらに引き出すためには、どんな環境が必要か。行動随伴性のA B C分析でいうところの（A）を、どのように多様化し、具体化していくか。生徒から適切な行動を引き出すための様々な（A）の工夫、引き出した行動（B）に対するポジティブな強化（C）については、本校では教員の愛情ある認める指導とG Bカード、N o. 1シール、N B M Wカードを活用している。

適切な行動が増えれば増えるほど、不適切な行動の割合は減っていく。教室で適切な行動を愛情深く認めて、大多数の生徒を勇気づけ強化する中で、できていない生徒がそれを見ていて、適切な行動をしようとするれば、その生徒の行動もまた認めてほめることができる。好循環の中で常に、できている行動やできそうな行動に着目し、適切な行動をあたり前と捉えるのではなく、「あなたはできている。」と愛情をもって認めることが重要である。それが生徒の適切な行動を強化し、生徒の自尊感情を高め、生徒自身が自ら適切な行動を選択する力である自己指導能力を高める。私たちは、自己指導能力という生きる力を身に付け、自分の将来を力強く拓くことができる生徒を育てるために、今後も笑顔でP B I S（倉敷モデル）に取り組んでいきたい。

## 【参考図書等】

- 「ポジティブな行動支援が増え、問題行動が激減！ P B I S実践マニュアル&実践集」栗原慎二編著 ほんの森出版 2018年
- 「マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり 日本版包括的生徒指導の理論と実践」栗原慎二編著 ほんの森出版 2017年
- 「月刊学校教育相談 2017年1月号 特集2 P B I S (ポジティブな行動介入と支援)の可能性を知る」『P B I Sの理論的背景とその実際』松山康成・庭山和貴,『学校にP B I Sを取り入れる工夫』枝廣和憲,『総社西中型のS W P B I Sの実践～先手必勝の生徒指導を目指して～』三宅理抄子 ほんの森出版
- 「月刊学校教育相談 2018年5月号 特集2 学校にポジティブなトーンをつくりだすP B I Sの可能性を知る」『学校全体で取り組む「子どもの良さを認める指導」スクールワイドP B Sの実践紹介』石黒康夫,『学校の力を再生するP B I Sの魅力』松本一郎 ほんの森出版
- 「月刊学校教育相談 2020年1月号 特集1『解決志向』の発想が学校にもたらすもの」『解決志向で子どもたちに笑顔の花を咲かせたい』浅原雅恵,『エリクソンのメガネで学校を元気に!』松本一郎 ほんの森出版
- 「<森・黒沢のワークショップで学ぶ>解決志向ブリーフセラピー」森俊夫・黒沢幸子著 ほんの森出版 2002年
- 「解決志向のクラスづくり 完全マニュアル チーム学校, みんなで目指す最高のクラス!」黒沢幸子・渡辺友香著 ほんの森出版 2017年
- 行動分析学研究 2020 VOL. 34 NO. 2 「特集:学校現場におけるP B Sの最前線」一般社団法人日本行動分析学会編
- 「世界の学校予防教育～心身の健康と適応を守る各国の取り組み～」山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生編著 金子書房 2013年
- 「学校秩序回復のための生徒指導体制モデル」石黒康夫著 風間書房 2015年
- 「参加型マネジメントで生徒指導が変わる～『スクールワイドP B S』導入ガイド 16のステップ～」石黒康夫・三田地真実 図書文化社 2015年
- 「できる!をのばす 行動と学習の支援 応用行動分析によるポジティブ思考の特別支援教育」山本淳一・池田聡子著 日本標準 2007年
- 「認知行動療法とブリーフセラピーの接点」津川秀夫・大野裕史著 日本評論社 2014年
- 「学校でフル活用する認知行動療法」神村栄一著 遠見書房 2014年
- 「心理学 de 学級経営 ポジティブ学級に変える!解決志向アプローチ入門」岩田将英著 明治図書出版 2015年
- 「心理学 de 学級経営 勇気づけの教室をつくる!アドラー心理学入門」佐藤丈著 明治図書出版 2016年
- 「自律的な学習意欲の心理学」櫻井茂男著 誠信書房 2017年
- 「人的環境のユニバーサルデザイン」阿部利彦・赤坂真二・川上康則・松久眞実著 東洋館出版社 2019年
- 「3ステップで行動問題を解決するハンドブック 小・中学校で役立つ応用行動分析学」大久保賢一著 G a k k e n (学研) 2019年
- 「かくれたカリキュラム発見・改善ガイド」横藤雅人・武藤久慶著 明治図書 2014年